

よびごえ

因速寺機関誌

VOL, 141



仕事柄、たくさんの方の葬儀を勤めてきた。葬儀とは、生者が亡くなられた方を前にして、弔いの儀式をおこなうことだ。人間が他の動物と違うところは、「葬儀」をおこなうことだとも言われている。そこには、人間だけにしか与えられていない「死という意識」があるからだ。昨日もある方が亡くなったと知らせを受けた。そして葬儀の日程などを打ち合わせた。そうしているとき、私は、その「死者」から、「お前は、私をもう済んだことにしていないか！」と問われた。確かに「死」を片付けたことにしていたからだ。しかし、本当は、まったく済んだことではなかった。そもそも、「死」とは何かが分かっている。死者の死」は知っていても、「自己自身の死」は体験したことがない。ということは、「本当には死を知らない」のだ。「死」を知らないのにもかかわらず、「死者」を、もう済んだ「過去のひと」にしていた。これは「死者への冒瀆」だ。そう思ったら、いままで、地球上における何十億人の「死者たち」が蘇ってきた。彼らが「死者」をやめて、「問者」として蘇ってきた。生き返ってきて、私を問うのだ。「お前自身は、どうなんだ！」と。「私を『死者』という檻に閉じ込め、他人事にしているのか！」と。「死者」は死んでいない。

一人一世界だけが生きられる世界

武田 釋定光（住職）
しやくじやうこう

■常識は非常識■

私たちが生きている世界は、一つではない。こんなことを言う
と、変に思われるかも知れない。私たちは、地球という一つの惑
星に住んでいる住民であり、全世界にはたくさんの国があると、
「常識」は思っている。この「常識」は間違いではない。間違い
ではないのだけれども、これは、とても危ない考え方だとは気づ
いていた方がよい。

もし世界が一つであり、限られた広さを持ったものだとすると、
領土を奪い合うという発想が生まれる。自分たちの領土を広げ、
相手の領土を狭めたいという欲望が野放しになる。

また世界が一つだと思うと、価値観まで一つになりがちだ。例
えば、「貧＜富・美＜醜・優＜劣・損＜得・有用＜無用・有意味＜無意
味」などは、それぞれ、一つの価値観の両面を表している。一つ
の価値観は、必ず両面の価値を生んでしまう。

昨日（4/30）、面識もない女子高生を刺殺した二十五歳の男は、
犯行動機について、「自分は社会の底辺にいる」と述べたそうだ。
彼は「社会（世界）は一つ」だと思っていたに違いない。その社
会を「幸福＜不幸」という一つの価値で差別化し、自分は「底

辺」だから「不幸」だと決めつけ、自暴自棄になったのだろう。

■「たった一人のほんとうの神さま」という発想■

ところで、中世・一神教の価値観は、この世界を一つの神様が
創ったと考えた。神様は唯一であり、絶対的なものだと言った。
こう決めてしまうと、神様という一つの価値観に両面が生まれる。
つまり、神様に気に入られる者と、嫌われる者だ。

話は飛ぶが、宮沢賢治は『銀河鉄道の夜』の中で、こう書いて
いる。それは女の子と男の子と青年の会話だ。男の子「天上へな
んか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりも
もっといいところをこさえなきやいけないって僕の先生が云った
よ」。女の子「だつてお母さんが行つてらっしゃるしそれに神様
がおっしゃるんだわ」。男の子「そんな神さまうその神さまだ
い」。女の子「あなたの神さまうその神さまよ」。男の子「そう
じゃないよ」。「あなたの神さまうその神さまですか」、青
年は笑いながら云いました。男の子「ぼくほんとうはよく知りま
せん。けれどもそんなでなしにほんとうのたった一人の神さま
です」。青年「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」。
男の子「ああ、そんなでなしにたったひとりのほんとうのほん
とうの神さまです」。（※現代表記に直した）

ここでの男の子と女の子の言い争いが、あらゆる戦争の起原に
つながっているように思う。「たった一人のほんとうの神さま」
とは、自分の見方を正しいと正当化してくれる神さまだ。相手に
正義はなく、自分にだけ正義を与えてくれる神さまだ。人間のす
るあらゆる争いは、必ず自分が正義で、相手は不正義という価値
観から発生する。そもそも人間には、「正義」などないのに。

奇しくも、二十五歳の男は、この発想になっていたようだ。社会は一つであり、その社会が自分を圧迫してくる。自分は社会の犠牲者であり、この社会への恨みを晴らそうと犯行に及んだ。自分には犯行を犯すだけの「正義」がある。それは社会へのプロテストだと。「正義」を見つけると人間は、途端に残虐に豹変する。

■「一全世界観（一世界全生物包摂世界観）は「妄想」」

私は、世界は一つだと考える発想を「一世界全生物包摂世界観」と呼んでいる。これは長すぎるので、「一全世界」と略称する。まあこれは「常識」となっている世界観だ。この「常識」は便利なものだが、私たちの生きられる世界ではない。むしろ、〈一人一世界〉こそ生きられる世界である。これを教えてくれたのが、ユクスキュルだ。彼は動物学者であり、いろいろな生物を観察した。そして彼の発見した世界を、私は〈一人一世界〉と名づけた。彼は「世界が客観的にたった一つだ」という見方は「妄想」であり、こう言っている。

この妄想は世界というものは、ただ一つしか存在しないもので、その中にあらゆる生物主体が一樣にはめこまれているという信仰によって培われている。ここからすべての生物に対して、ただ一つの空間と時間しか存在しないはずだという、ごく一般的な確信が生まれてくる」（『生物から見た世界』

思索社）

私たちが「現実」だと思っている世界は「妄想」だったのだ。私は、あらゆる生物の中における「特殊な存在」だ。私は他者と取り替えることのできないのちを生きている。ということは、この世界は私だけが生きている「特殊な世界」ということになる。

ただし人類は生物学的に「似た体型」をしているので、世界を同じように感じてしまう。「似た」ように感じることはできても、まったく同じということはない。納豆が好きというひともしれば、嫌いなひともしいる。大雑把には「似て」いても、微細なところは違っている。顔の作りは「似て」いても、「同じ」顔がないのと同じだ。いわば世界は多重になっていて、他の生物と世界が重なり合っているのだ。地球に八十億人いれば、八十億の世界がある。決して「世界は一つ」などではない。

仏教が主張してきた「生老病死」とは、〈一人一世界〉でのみ起こる現象だ。切実な意味で、他者には起こらない。

■〈一人一世界〉は自己Ⅱ世界

誤解を恐れずに言えば、〈一人一世界〉とは、「世界Ⅱ自己」である。「世界」は無量無数の関係で構成されている。この構成全体が「自己」だ。「自己」の身体も何十兆個の細胞の構成でできている。身体も単体では存在できない、無量無数の関係で成り立つ。つまり、この「世界」そのものが「自己自身」なのだ。この「世界」をどのようなものとして受け取るかは、自己一人にまかされている。その男のように、受け取り方次第では、「圧迫」と感じられる。それは価値観が硬直し、一元化されているからだ。それが「妄想」だと気づくこと。それには〈一人一世界〉が本当の世界であり、生きられる世界だと目覚めること以外にない。と言うか、〈一人一世界〉が、人間の生きられる「本来の世界」なのだ。もともと、〈一人一世界〉以外を生きてはいなかったのだ。そこに帰ればよいだけのことだ。〈一人一世界〉こそ、存在の故郷ではなからうか。

愛するとき人と

ともに悲しみを生きている

芳賀^{はが} 幸洋（茨城県水戸市）

中学・高校在学中は、バレーボール部で厳しい練習に明け暮れ、その後もランニングなどの運動を好んだ私は、体力と健康だけは自信があった。しかし、ここ数年の人間ドックでは、長年に亘る過酷な看護師の勤務（現在は茨城県笠間市内の精神科病院）や、健康への意識の低下も相俟って、幾つかの生活習慣病を指摘される状態に至ってしまった。

そういう経緯もあり、目標とする健康長寿に向け、ウォーキングから運動を再開するようになった。そんな4月上旬の夕暮、自宅付近の桜並木通りを歩いているとLINEの着信音が鳴った。武田住職からの「よびごえ」の寄稿依頼である。3000字くらいでテーマは何でも構わないとの由。率直な感想は「困ったなあ：何故私に？」だった。

そのまま歩きながらいろいろ考えた挙句、「頑張って勤めさせていただきます」と返信した。前向きに引き受けた第一の理由は、因速寺とのご縁への報謝である。第二の理由は、私の25年に亘る看護師としての経歴（特にがん病棟や、医療観察法病棟という、心神喪失等の状態で他害行為をした精神病患者の治療病棟）と、これまでの人生の悲哀体験が、浄土真宗の信仰を深める契機にな

っていることを確かめたかったからである。「よびごえ」の寄稿が、今後の人生の転換点になるかもしれないという期待感もあった。

私は昭和47年、ふたつ年上の姉、ふたつ年下の弟の3兄弟の長男として生まれた。若くして実母が亡くなったため姉と私は、伯母の養子（以下伯母を母と記す）となった。祖母と2人暮らしだった母（私と姉の養子になる前にも伯父の息子2人を預かって育てる）、そして私の姉弟の人生は一変したのだが、姉と私を慈愛深く育ててくれた祖母と母には感謝しかない。母は、仕事（学校給食調理師）と祖母の看病と子育てを鼎立させていたのもあり、私が中学生の頃に腎臓病に罹患し、長い入院生活を余儀なくされた。姉と私は、実母の死別の悲嘆を共有し、母の回復を祈りながら仲睦まじく精一杯生きていた。心無い言葉を発する親類に憤慨する私を、姉は（姉も言われていたにも拘わらず）常に優しくなだめてくれた。

ところが、そんな姉も若くして亡くなってしまった。夢を抱いて努力していた姉の無念さは筆舌に尽くしがたい。実母と姉の死で号泣する母の涙（それ以外の母の涙を私は見たことがない）は思い出すだけでも辛いのだが、このふたつの悲嘆が母と私の絆を深めたのは間違いない。母のふたつの涙と、姉の夢を絶たれた無念さ、そして祖母が亡くなる直前に「幸洋、さよ子（母の名前）には迷惑かけたから、お願いだから、さよ子を幸せにしてくれ」と、か細くなった手で私の手を握りながら、母の回復と幸せを願う姿が、後年の様々な困難を乗り越える大きな力となった。

笠間市には西念寺^{さいねんじ}（親鸞^{きんらん}が『教行信証』^{きょうぎょうしんしやう}を著しながら布教活動

に勤^{いそ}しんだ拠点）があり、水戸市には『歎^{たん}異抄』の著者のひとり
と目される唯円^{ゆいえん}ゆかりの報佛寺がある。西念寺と報佛寺は、母と
頻繁に参拝（因みに芳賀家の手次寺は水戸市安楽寺^{あんらくじ}）した思い出
の場所でもある。

また両寺院の住職様と坊守様は、母が亡くなって悲嘆に暮れて
いた私に寄り添ってくださった。その後、報佛寺で毎月開催され
ている「歎異抄を読む集い」にも参加させていただき、令和6年
12月の報佛寺での報恩講での武田住職の法話を拝聴し、現在の
ブッディサロン参加に至っている。

先祖からの加護や、浄土真宗への篤い帰依もあって、母は奇跡
的に健康を回復。2022年9月に85歳の人生を全うして浄土
に還った。コロナ禍までは、毎年私と一緒に国内ツアー旅行をし
て、家庭菜園で作った野菜を近所に配るなど、充実した老後を通
ごした（と私は信じた）。最後の旅行となった、念願の
高千穂峡^{たかほきょう}ツアーで母が「10年後くらいに遺影にしたいね」と話
していた笑顔の写真（結果的に3年後になってしまったが）を撮
ったのが昨日のことのように思い出される。「死ぬまでにハワイ
に行きたい」という宿願は叶わなかったが、私との旅行は、若か
りし頃に置き去りにしていた夢（新聞記者として全国を駆け回
る）や希望を取り戻すような時間だったのかもしれない。私は再
び母と姉と一緒に過ごせるならば、何度でも生まれ変わりたいと
思うが、今はただ様々な悲嘆とともに過ごした母や姉との日々を
有難く追想するのである。

先に記した医療観察法病棟では、足掛け6年、重大な他害行為
（殺人や放火など）を犯した精神病患者と、決して会うことのな

い被害者の悲嘆に直面せざるを得ない状況となり、私は食欲不振
や不眠傾向に陥り、心身ともに疲労困憊となった。母にも心配を
かけた。しかし、他害行為に至るまでの患者の成育歴や想い（罪
への内省を含めて）を傾聴するにつれて、悲嘆（悲嘆経験）は、
人間の宿命であり、それがあからこそ生の輝きや喜びが湧出す
るのだと確信するようになった。

そして今まで何気なく読んでいた歎異抄（特に第一節の書き出
し（「弥陀^{みだ}の誓願^{せいがん}不思議^{ふしぎ}にたすけまいらせて、往生^{おしょう}をばとぐる
なりと信じて、念仏まうさんとおもひたつころのおこるとき、
すなわち撰取^{せんしゅ}不捨^{ふしや}の利益^{りやく}にあづけしめたまふなり：」）の世界観
に、私はこれまで以上に魅了されたのである。南無阿弥陀仏を称
える自分の信心を深めるために生きて学ぶ（仏になって生きて学
ぶ）、そのためには自他の悲嘆と向き合い、「悲しみとの融和」
を実践しなければならなかった。

歎異抄の書かれた鎌倉時代（戦渦や飢饉の時代）の人々のよう
に、悩みながらも念仏を信じて力強く生きたいとも思った。いつ
しか西念寺の「見返り橋」に佇みながら私は、念仏弾圧での流罪
や法然^{ほうねん}との離別、そして死の数年前に子である善鸞^{ぜんらん}との義絶とい
う悲嘆を経験しながらも莊嚴な人生を全うした親鸞に思いを馳せ
るようにもなった。そして「見返り橋」の石碑にある、「別れじ
を さのみなげくな法の友 また会う国の ありと思えば」とい
う親鸞の歌に私は時空を超えて励まされているような心地に浸る
のである。

大切な家族との死別（愛別^{あいべつ}離苦^{りく}）を経て、悲嘆はなくてはなら
ないと確信するに至った私は、疲労困憊した心身の救いが必要だ

ったこともあり、医療観察法病棟で勤務しつつ、都内の私立大学で5年間グリーンケアを学んだ。この経験が私に「愛する亡き人とともに悲しみを生きる」という強い信念をもたらした。

四苦八苦（最近では五蘊盛苦が悩ましいが…）の多い人生かもしれないが、生死を離れて、仏に成ろうとする菩提心を抱きながら生きるためには、自分の悲嘆をあたかも田畑を耕して豊饒な土壌にするように深めなくてはならなかった。

多くの素晴らしい先生方から薫陶を受けたが、とりわけ文芸評論家の若松英輔さんからは、悲しみの叡智や「ことば」の奥深さ、「書く」ことの偉大さを教えていただいた。若松さんが「悲しみという種子に涙を注いで、芽を出して、大輪の花を咲かせる。悲しみとともに、目に見える涙や、目には見えない涙を流せる人間は偉大である」と講義中に話されたような人生を私は歩みたい。それが私の愛する亡くなった方々への供養であるとともに、信心を深める生き方に繋がるのではないだろうか。

2011年3月11日の東日本大震災時の記憶も忘れ難い。祖母の死を看取った影響もあるが、死を告知された患者に寄り添いたいと考えていた私は、当時看護師9年目で、水戸市内の総合病院4階に勤務（4月からは現在の精神科病院に転職することになっていた）していた。経験したことのない揺れで病院が倒壊して「私は死ぬのだ」と覚悟する（不思議と死の恐怖はなかった…）と同時に、高齢の母の死も覚悟した。ところが、幸いにも母と私は無事で、母との絆は深まることになったが、阿鼻叫喚の場と化した最中に亡くなった患者（「どうして死ぬ前にこんな目に合うのよ、助けて！」と泣き叫ぶ患者さんだったが、私は災害救護活

動に奔走しなければならず寄り添えず、数日後に逝去」とその家族の悲嘆を偲んで、毎年の震災日には必ず南無阿弥陀仏の念仏を捧げている。

人間の悲嘆に寄り添う看護師の仕事と、グリーンケアと浄土真宗の教え（殆ど理解できていないので僭越ではあるが…）の3つに出逢えた私は本当に幸せである。愛別離苦の悲しみが看護師としての使命感を呼び覚まし、グリーンケアを学ばせ、ひいては浄土真宗の教えを深く学ばせる契機となった。歎異抄やその解説書（特に明治大正期の蜂屋賢喜代師）を熟読していると、南無阿弥陀仏の教えとともに「生きながらにして仏の人生を歩む」「生死を離れて信に生きる」との思いを強くする。すべての学びは「信心」を深めるためであり、その学びは一生続く、とも蜂屋師から教えていただいた。さらに報佛寺での「歎異抄を読む集い」では、住職様や、茨城歎異抄の会の川島弘之先生から多くの薫陶を受けて、その都度自分の浄土真宗への認識を新たにさせていただいている。

そんな経緯もあって、現在も看護師として働きながらグリーンケアを学び続け、西念寺や報佛寺を参拝し、因速寺で武田住職や御同朋との語り合う奇遇に恵まれている。人間は四苦八苦と背中合わせの理不尽な人生を歩まなければならないが、私は愛する亡くなった人々の悲しみとともに生きることが、「尊い人生である」と考えている。そうでなかったら、あらゆる芸術の存在価値はない。そして悲しみを抱えながら生きることが「詩情的」であるとするならば、私は自分の詩情（悲しみ）を昇華させたい。私の詩情が昇華されることが、念仏への信心も高めることに繋がる

のではないだろうか。

念仏を称える私の傍らには、常に愛する亡くなった人々が寄り添ってくれている。それは阿弥陀さまが「我能護汝（われよくなんぢをまもらん）」と優しく抱擁してくださる姿と重なる。私は南無阿弥陀仏の念仏を称えながら掌を合わせていると、母が私の横にいるような、もしかすると母が阿弥陀様ではないのかと錯覚してしまうほどだ。自宅から国道6号を経て因速寺に向かう私は、さながら歎異抄第2章に登場する親鸞の弟子になったような気分です、親鸞のような武田住職に教えを乞うのである。

僭越かつ拙劣ながら、私個人の悲しみや南無阿弥陀仏の念仏への想いを寄稿させていただき感謝申し上げます。書きながら亡くなった家族だけでなく、看護師で出会った患者、若くして亡くなった同級生、そして父親代わりとなって亡くなる直前まで愛情を注いでくださった高校時代のバレーボール部の恩師：を思い出して涙が出ました。若松英輔さんはグリーンフケアの講義で「悲しみが深すぎる時、人間は涙も出ない」と話しておられましたが、私はようやく泣けるようになるまでに悲しみと融和できるようになりました。これからはさらに学びを深めて、南無阿弥陀仏の念仏信心を深めていきます。

【追伸】

茨城県は巷間の俗説では魅力度最下位の都道府県と言われているようですが、水戸市は歴史ある街で、美味しいお店も沢山あります（母と私が頻繁に通った「茨城スタミナラーメン松五郎」は特にお勧めです。茨城の農産物も笠間の栗をはじめ豊富です）。西念寺や報佛寺など浄土真宗ゆかりの寺も多く、ぜひ茨城にお越し

ださい。ご希望の方がおられましたら私が喜んでご案内いたします。

■芳賀さんとも、不可思議なご縁で出会わせていただきました。「ひとに歴史あり」と言われる通り、芳賀さんの人生も波瀾万丈でしたね。お母さんとの別れ、追い打ちを掛けるように、頼りにしていたお姉さんとの別れ。しかし、芳賀さんと影の如くに伴走を続けていたのが阿弥陀さんだったのですね。私は、「痛みは身にある、悲しみはここにあり」と言っています。芳賀さんの言う「愛別離苦」は、〈一人一世界〉にしか起こりません。お母さんとの別れ、お姉さんとの別れ、その間にしか「悲しみ」は起こりません。決して他者には分らない領域にあります。またその「悲しみのこころ」は、おそらく「人間」にしか起こらない感情だと思えます。「悲しみのこころ」とは「煩惱のこころ」が引き起こしてくるものです。「煩惱」とは、「貪欲」です。「貪欲」とは、自分の欲望のままにすべてを手に入れ、支配したいという欲求です。母を姉を、自分の欲望の対象にし、自分の欲しいままにしたいという欲望です。阿弥陀さんは、人間には「純粹な愛情」はないと、厳しく批判されます。「純粹」とは「無私の愛」です。人間が「愛」を感じる対象には、必ず「私」が介在します。「私の子供だから。私の親だから。私の伴侶だから。私の孫だから」と、必ず「私の」という貪欲がはたらきます。この貪欲が断念させられたとき、人間は「悲しみ」を感じます。ですから、貪欲が「悲しみ」の感情を生むのです。この貪欲に騙されないことです。そこで初めて、お母さん・お姉さんを佛様にお渡しできましよう。

住職

「仏法聞き難し」(その1)

加藤 伸吾 (神奈川県川崎市・
東京真宗同朋の会)

ご住職から寺報に載せる文章をともったいないご指名をちょうだいした。せっかくの機会なので、この際自分の浄土真宗、あるいは宗教との関わりを振り返らせていただこうと思う。

わたくしと、浄土真宗との最初の「接近遭遇」は幼稚園のときで、麻布十番にあるお西の麻布山善福寺あさぶさんぜんぷくじの附属幼稚園に入れてもらえたのであった。両親とも無宗教、いやむしろ宗教を嫌悪していたはずなのだが、名門というだけで入れたのだと思う。しかし、これがいうなれば幼児教化となったのであろう、親曰く「お地藏さんを見つけたらすぐ手を合わせに行くような子」になり、「のさま」(日本国語大辞典によれば「幼児語。神・仏や日・月など、すべて尊ぶべきものをいう語」とのこと)という単語も覚えた。

恐らくこの幼稚園の時に、初めて口からお念仏が出るという出来事があったはずである。善福寺の本堂にもお参りぐらいして、お坊さんのお話を伺っていたことだろうと思うし、であればそれが人生初のお聴聞体験のはずなのだが、実はあまりよく覚えていない。お坊さんが童謡「りんごのひとりごと」を歌っていたのだけは、なぜか強烈に覚えている。他に今思い出せるのは、大きな親鸞聖人像(当時は聖人が誰かももちろん知らない)と、

聖人が杖をついたところから生えてきたとされるイチヨウの木、タウンゼント・ハリスがここを宿としたという記念碑、越路吹雪こしじふぶきの碑、福澤諭吉ふくざわゆきちの墓、そして何より、さつまいもの畑、それに生方と友達の笑顔である。

その後地元の公立の小学校に行き、心の底からイヤだと思いつながら塾に通って中学受験をして(この塾に通うストレスでできたであろう潰瘍の跡が、社会人になってからの胃カメラ検診の際見つかったぐらい)、全くもって第一希望ではなかった、中高一貫の芝学園に入学する。これも後からその重要性に気づくのだが、芝学園はかの増上寺のかつての境内地にある浄土真宗門校である。とはいえ都内の色々な仏教宗派のお寺の子弟が通ってきていた。

千五百人近くの全校生徒を収容できたはずの当時の芝の講堂正面には、大きな金色の法輪の六字名号ろくじみょうごうが鎮座ましましていた。自分のはつきりと思い出せる初めての口称念仏くしょうねんぶつの経験は、この芝の時のものである。浄土宗なので、各自がそれぞれのタイミングと声量でお念仏するのではなく、お導師さま(多くの場合、芝の教員でもある)が「同称十念どうしょうじゅうねん」とリードした後に、全員で声を揃えて十回お念仏する。講堂を埋める約千五百名の思春期の男子が一斉にお念仏するさまは、側から見ていれば壮観：いやむしろ結構異様な光景？だったのではなからうか。

頻度は多くても隔月ぐらいだったかと思うが、同称十念の節回しはいまだに身体に染み付いている。生徒手帳には法然上人の『一枚起請文いちまいきしょうもん』、チャイムは同じく上人作の短歌が歌詞である浄土宗歌の『月かげ』(「月影の いたらぬ里は なけれどもながむる人の 心にぞすむ」)のメロディーであった。上人の

祥月命日のある御忌には増上寺に参拝して、恐らく宗門内でも地位の高いであろうお坊さんのお話を毎年聴いていた。これも貴重なお聴聞体験となるはずのものだったかもしれないが、残念ながら、正座がしんどすぎて内容は全く覚えていない。

それよりも覚えているのは、釈尊の一生とその教えについての授業だった。恐らく通常の中学高校の道德の授業の代わりだったのではないと思う。古文で習った『平家物語』冒頭のそれともあいまって、すっかり「諸行無常」という言葉が焼き付けられてしまった。同じ時期に芥川龍之介の『羅生門』の映画を見て感銘を受けるも、その後、芥川が自死していることを知ってひどくショックを覚え、そのためか今ではすっかり定着してしまった感のある心理学用語、いわゆる希死念慮に悩まされていた時期もあった。「諸行無常」という言葉に（誤って）ニヒリズムを感じてしまったことも影響しているかもしれない。友達もさほどできず、部活にも入らず、そして当時の私をはじめ男子中高生最大のテーマであった（今もきつとそうだろう、残念ながら）「異性にモテる」ということに関してサッパリだった。楽しかったのは文系科目の勉強と、クラシック音楽を聴くこと、それと歴史作家の塩野七生、SF作家の田中芳樹の作品を読むことだった。ちなみに、この二人の作品は、私がその後研究者として地中海国家スペインの民主主義を扱うことになる重要なきっかけとなっている。塩野はイタリアを愛した人だが、私をイタリアだけではない広い地中海世界に広げてくれた。また、塩野も田中も民主主義を絶対視していないが、それでも人類の「知恵」の結晶として、民主主義は守られるべきものである、との現在の私の価値観は、田

中作品の持つ魅力の強い影響下に作られたものである。

暗い中学高校時代ながら、幸いに勉強、特に英語と世界史ができたので、志望校であった上智大学に入れた。今度は仏教を離れ、カトリック内の「武闘派」（失礼）、イエズス会の宗門大学である。中高でモテなかった分をなんとか取り返そうとしたのか、テニスサークルに入って遊んでばかりいたことを今も心の底から後悔しているが、それでも楽しい日々だった。戻りたいとは思わないが、それでも人生で一番無邪気に楽しんでいた時期だった。

とはいえ、不勉強ながらも人生や社会に対する何らかの問題意識は持っていて、塩野七生によれば「折衷の才豊か」なカトリックの信仰の現場、特に社会問題に熱心に取り組む神父様方を見て、それまで以上に宗教的な言説へのいわば「免疫」がついた。

何より初めて地中海を見たのは、神父様引率の西欧諸国歴訪ツアーであった。また今思えばあの旅程の一部は、いわゆる団体参拝で、世界各国の団参客数千人に混じって、当時の教皇ヨハネ・パウロ二世の前で、我々が『さくらさくら』を歌ったのは良い思い出である。

そのツアー最後の国がスペインで、当時は知る由もなかったのだが、十五年ぶりの政権交代となった歴史的な総選挙の真っ最中であつた。「なんでこの人たちはこんなに政治を愛しているのだ」とかなりインパクトが大きかった。街のあらゆる箇所が政治宣伝のポスターで埋め尽くされていた。なお、その一九九六年総選挙の投票率は七十七%である。たかだか六十%弱で投票率が比較的高い、と言われてしまう日本の選挙権保持者としては、率直に言ってうらやましい。

そんなこともあり、大学院の博士前期（修士）課程ではスペインのナシヨナリズムをテーマに選んだ。そのまま別の大学院の博士後期課程に進学する予定だったが、バブル崩壊の煽りで就職せざるを得なかった。平たく言って不本意極まりない就職で、また暗い時期がやってきた。抑うつや希死念慮も久々に復活してしまった。それが底を打つのは、やはり地中海に面している国エジプトに、初の有給休暇で旅行に行った時だった。発展途上国への旅も初めてで刺激に満ちていたが、何より「この人たちは明日生きていることが当たり前ではない」ということがショックだった。今思えばそう思うエピソードのような何かがあるわけではなく、強いていえば客引きぼったくりカフェ（と後で知ることになる）に出入りしたり、道端で出会った紳士然としたおじさんに、滋養強壮剤のような塗り薬を無理やり買わされそうになったりということぐらいなのだが、砂と煤煙（ばいえん）にむせかえるカイロの街を足早にゆく人々の顔を見ると、なぜか皆今日のいまこの瞬間を、ただただ必死に生きているとしか思えなかった。

そして翻（ひるがえ）つて思うのであった、「自分は何をしているのだ」と。あの時は、幼稚園や中高で縁のあったお念仏や阿弥陀さんのことなど、すっかり忘れていた。しかし、今はあの時の光景を、エジプトの人々を通じて「真実」が、蓮如さんの言葉を借りれば「後生（ごしょう）の一大事（いちだいじ）」が、私にアプローチしてくれたのではないか、と思っている。

そのおかげで、ようやく社会人として本腰を入れて労働に向き合うことができるようになったが、それはそれで労働集約的で残業が多いＩＴ業界への就職だったし、「大学院まで行って学んだ

ことが何も生かされていない」という、「キャリアはなるべく直線的であるべきである」という「べき論」に基づく、いわば妄念も少しづつ湧いてきて、数年でまた暗くなってしまうた。

そこで先輩に紹介されたのが、スペインにある日本大使館で働ける、修士号保持者のみにしか受験が許されていなかった、二年任期の外務省在外公館専門調査員の試験であった。結果としては通ったのだが、後で知ったこととして、残り私ともう一人の間で選抜、となった段階での面接で、そのもう一人の方の失言があったことによつて私が合格したらしかった。つまり、私の力ではなかったのである。

それでもスペインでの勤務は楽しく、また日本で行きそびれた博士課程に、スペインの通信教育の大学で行つて博士論文執筆資格を得ることができた。しかしそこで襲ってきたのがいわゆるリーマン・ショックだった。当時の専門調査員はまだ給料が良く、かなり貯金ができたはずだったのだが、何せユーロで給与が支給され貯金もしていたために、円高ユーロ安のおかげで貯金の三分の一ほど、七桁単位のお金が瞬く間に溶けてしまった。この時のことは、折に触れ色々な人々に話しているが、心境としては「こんなもんかな」という程度ではあった。「諸行無常（しよぎやうむじやう）つてこういうことをいうんだろうな」とぼんやりと思つていた。

それでも残った金をなんとかやりくりしつつ、帰国後ようやくスペイン語とスペイン現代史をいろんな大学で教える非常勤講師掛け持ちのキャリアがスタートした。今思えば結構、貧乏で体力的にもしんどかったが、ひよつとすると安定した職のある今より充実感があったのかもしれない。その時の差し当たりのゴール、

かつ教育研究職としての本当のスタートは、フルタイムの専任教員になることだが、数年間で五十近くの公募に落ちまくった。そこで拾ってくれたのが、最初は出身校の上智での研究員職、次に関西外国語大学での四年の任期付きフルタイムのポストだった。と、ここまで読まれて、いつ本格的に浄土真宗の話が出てくるのだと思われた方も多いだろうが、お待たせしました。

この関西外大時代に住んでいたのが、我らがご本山・京都は東本願寺の飛び地境内、渉成園しょうせいえんの隣にある河原町七条かわらまちしちじょうのマンションだった。その時にいわば近所の本山、阿弥陀堂あみだどう門横の看板で出会ったのが「いま、いのちがあなたを生きている」という言葉だった。二〇一一年、親鸞聖人七百五十回ご遠忌の際の真宗大谷派の標語である。二〇一四年の当時は「いやいや逆だろう、わたしが命を生きとるんでしょ」とツツコミを入れるのみだったのだが、それでもその言葉が妙に突き刺さって、その後も「結局あれはこういう意味だったのか？」と折々思い出すことになる。

だがその京都時代も縁あってたった一年で終わってしまい、東京の今いる大学に転職する。しかし京都時代の一年間はご本山へのお参りも、閉園十五分前の渉成園を、守衛さんに後をつけられながら足早に見て回ったのみで、御影堂ごえいどうにも阿弥陀堂にも行かずじまいだった。ここからしばらく、宗教というものからは、典型的な日本人の盆暮正月クリスマス、バレンタインにホワイトデー程度のことで、基本的には足が遠のいてしまう。ちなみに幼稚園には就職先の学祖が眠っているので、さすがに手を合わせに行った。でも確かあの時にお念仏はしていない。案外献花が少なく驚いた記憶がある。二〇一五年の春であった。この次にやってきた

イベントたちが、なかなか強烈であった。そのおかげで、それまでの漫然と仏教のことを折々思い出しながら過ごしていただけ、お念仏にも出会っているように出会っていない自分の人生に、仏教・真宗が交わる、いや、ガツンとぶつかってくることとなる。
(続く)

■加藤さんとも、また不思議なご縁で出会わせていただきました。文章を読ませていただき、なんと「天賦の才」に恵まれたかたなのだと羨ましく感じました。加藤さんが、どのように「真・宗」と出遇っていかれるのか、小説を読むようなワクワク感を持ちました。まあ今回は「『仏法聞き難し』その1」なので、「その2」が、いまから読みたくなりました。しかし、「出遇い」とは、最初に出遇ったときには、それが「出遇い」だとは感じられないものなのかも知れません。出遇っていたものと同伴しているなかで、あるとき「あれっ！出遇っていたのか」と振り返って知るものなのでしょう。親鸞聖人も「噫ああ、弘誓ぐぜいの強縁ごうえん、多生たしやうにも値もうあい亘がたく」（『教行信証』総序）と、ご自分が「真・宗」と出遇ったことを感慨深く振り返られています。「いま」出遇ってみれば、この出遇いが成り立つための縁（過去）がすべて、このことのためだったと生きてきます。しかし、そういっただけなければ、過去はすべて恨みの種となりましょう。それを決めるのは「いま」です。もつと言え、私たちは、阿弥陀さんと「十劫じゅうきやくの昔」に出遇っていたのです。ただそれを忘れて生きているのです。それを思い出すために、阿弥陀さんは「弥陀成仏みだじょうぶつのこのかたは、「いま」に十劫をへたまえり」と叫んでおられるのでしょう。

◆新盆合同法要◆

兼ご命日の集い

7月6日(日)

午後3時～(受付2時)

冥加志 お一人三千円

(高校以下無料)

『ご命日の集い』として

ご参加の方は五百円

住職新刊本発売



『<真実>のデッサン8』
実費冥加金500円

◆写経の会◆

毎月1回 午後1時半～4時頃まで

開催日：7月9日(水) 8月はお休み 9月3日(水)

10月8日(水)

教材 .. 正信偈、仏説阿弥陀經、仏説無量壽經(上下)

冥加志：初回は三千円(教材費込み) 二回目以降五百円

一時間程写経に集中し、その後は本堂で勤行(おつとめ)

をします。お菓子とお茶を飲みながらワイワイ座談をする

会です。写経のみの参加でも構いません。

◆ブツデイサロン◆(輪読会)

一冊の本を皆で輪読した後、お酒と肴と仏法を味わいながら、語らう会です。参加されるかたは職種も様々、住所も様々、何も強制されることはありません。どなたでも参加自由です。

開催日：7月27日(日) 8月24日(日) 9月28日(日)

10月はお休み

冥加志：お一人千円 ※遅刻、早退自由です♪

〈因速寺護法会決算のご報告〉

令和六年度決算

会費収入

11, 296, 363円

(前年度繰り越し金を含む総収入)

19, 123, 007円

総支出

16, 372, 311円

次年度へ繰り越し

2, 750, 696円

令和七年三月三十一日現在

※詳細をご希望の方は、寺務所にお尋ね下さい。

雑言雑語

今年の春の法要も無事に円成し、東京教区慶讃法要も無事に乗り切った。法要後は疲れが取れずぐったりしていた。もう若くないんだと痛感している。思えば『准堂衆補』になつて、本山で約六十座を勤めたことになる。『准堂衆補』の『補』が取れ、『准堂衆』となるには、『約百座』と『勤続十年を経た者』という条件が必要になる。となると残り、秋の御正忌報恩講二回分(約四十座)になるだろうか。まさに修行である。話は変わるが、めつぼう最近法事でも、お通夜でも、念仏の音が聞こえなくなった。東京は念仏砂漠だからしょうがないと、諦めたことはない。自坊の法事も法話してから最後に「御本尊に合掌、お念仏を申してご法事を御終いにしたいと思っています」と勧めているのだが、シーンとして念仏の音が聞こえないのはやはり寂しい。「そういうお前は念仏申しているのか？」と阿弥陀さんから問われた。「法事の問、お通夜の問だけの念仏ではないのか」と厳しい問いかけだった。たしかに思い返してみれば、寝室の本尊には手も合わせず、『法座の時だけ』『門徒さんが居る前だけ』でしか念仏申していなかった。亡くなられた近田昭夫先生は、四六時中念仏申していた念仏者だ。念仏を勧めるにはまず、自分が念仏申していく生活を見直さなければならぬ。「念仏成仏是真宗」だ。まずはできることからコツコツひとつずつ念仏申す生活を始めていきたいと思います。 釋定志

表紙画題



『しもつけ』

武田美輪(坊守)

『よびづえ』一四一号

発行所 因速寺(真宗大谷派本山東本願寺)

〒136-0074 東京都江東区東砂1の4の10

☎(03) 3644-0986 FAX(03)3648-4391

Email info@insokuji.com

HP https://insokuji.com

編集・発行 武田 定光 Takeda Jyokko

発行日 二〇二五(令和七)年六月十五日

Copyright 1990 INSOKU-JI Printed in Japan